＜紹　介＞

外国のアナキスト・グループ　4

無回帰点の彼方へ

―情況主義者インター批判史

サラ・チェティン

小溝　光・訳

香港 ― 七〇年代戦線

ユー・ハン　他

無回帰点の彼方へ

情況主義者インター批判史

サラ・チェティン

小溝　光・訳

情況主義者インター（SI）の歴史は、近代プロレタリアートの歴史と不可分である ― 即ち、この両者は必然的に相関関係にある。近代資本主義に対する革命闘争の再現は ― 殊にその中でも、何人も無視し難い、あの一九六八年五月によって可視のものとなった ― その実践的表明のずっと以前に、既にSIによって理論的に公式化されていた。もし今日のブルジョア傍観者どもや彼らの仲間である左翼反動部分がSIの〝影響力〟を話題にする様になったのなら、それは彼らが〝客観的〟になろうと努めているのではなく、世界のプロレタリアートのラディカルな諸行動が彼らをそうせざるを得ない様に追い込んだからに他ならない。ますます多くの人々がSIによるプロジェクトの過程で、自己を認識し、その理論を自己のものとしている。そうした中で、あらゆる思想家は、SIの実在を承認しつつも、その思想の本姿を隠ぺいすることに全力を傾けた。〝情況主義〟というイデオロギーを勝手に発明し、自分らのラディカルな思想を一般大衆に、より、

〝明確〟に理解してもらおうと、情況主義者を〝アナキスト〟だの〝ダダイスト〟だのとわめきたてた。それでも少しは進んだ思想家はSIの思想をもって、自らの思想に終止符を打ちつつある。しかしながら、SIのシンパ革命者らでさえ、様々な幻想を抱いている。ことごとく！である。

組織としてのSIの実在は、〝思想体系〟としての神話的評価の大きさの陰で弱少化していた。SIが大いなるこの神話的評価と、それ故の大いなる社会的体面を獲得した、まさにこの時点で、SIを無批判的に、また単なる過去への脚注として把える者に対して、SIの真にラディカルな本質と共にその欠陥を明確に打ち建てる必要がある。そうした中で、我々は歴史家の展望からではなく、歴史を創らんとする人々に依拠しつつ出発する。

SIは、プロレタリアートの革命プロジェクトの本質をそっくり考え直すことが要求された時（一九五七年）に始まった。先進資本主義と〝社会主義的〟官僚制という双子の怪物を産み出した弁証法的論理の麻痺が、即ちプロレタリア革命に関する全ての過去の仮説がもはや廃物同様であり、一つの決定的な死を意味した。伝統的プロレタリア運動、それはマルクスやバクーニンの時代に、ブルジョアジーとボルシェヴィズムとの結合によって開始されたのであるが、その敗北は単なる一時的な退歩でなく、イデオロギーの力がそのまま武装力の役割を果したプロレタリアートそのものに対する、資本主義の宿望の反撃の開始を意味した。プロレタリアートの〝代理として〟行動した諸組織（組合、政党など）は、その反革命性を暴露された一方で、世界資本主義こそ最もラディカルな思想を自己のものとし、次にはそれをイデオロギーとしてプロレタリアートに対し、突き返す能力を証明してみせた。こうした不毛な条件下にあって、近代的資本主義形態に対する革命的な闘争を創造しようとする組織は、どんなものであれ必然的に、ブルジョア社会の新たな理論的批判を切り拓くことと同時に、近代的革命行動の可能性を産み出すことを余儀なくされた。つまり、一貫した革命的地平に到達するには、再び理論と実践的試行の長いプロセスを開始しなければならなかった。

SIがこうした出発を可能ならしめたのは、その初期形態として伝統的な意味の革命組織でなかったことに、大部分負うていた。むしろ情況主義者は原初的には文化領域に於ける、一種の実験グループを自認していたし、そのメンバーは芸術家として〝前衛〟の腐敗を体験し、その能力を新しいラディカルな方向に向けさせることで頭が一杯だった。一九五〇年代の後半、SIのプログラムはまさに〝文化革命〟のそれであった。「情況主義者の国際協会は、文化的に突出した尺度を備えた労働者の組合として、また社会諸条件によって現在妨害されている労働に対し、その権利を要求する者の組合として位置付けられる……」（G・デュボー『文化革命に関するテーゼ』SI誌一号）この段階ではSIはまだ前衛的文化組織として存在し、そのラディカルな活動は唯美的レヴェルに制限されたが、この芸術家グループは実際のところ革命組織グループと何ら変わりは無かった。小都会主義（ユニタリー・アーバニズム）の概念を産み出そうと、SIは近代社会の日常生活に対する批判を展開し始めていたからである。SIが当時最もラディカルな立場を前進させたのは、他ならぬこの理論的領域であった。

初期のSIが近代の革命プロジェクトの発展に力を与えたものは、とりわけ革命の純然たる反政治的次元の公式化である。殆んどメンバーがその文化的背景からの出発という限界を背負いつつも、それは社会主義の問題に対し質的に新しい展望を引き出し、左翼思想家らのあらゆるウソに対し、革命とは犠牲、位階性、あるいは支配階級エリート間の権力交替とも無縁のものであると論じてきた。近代プロレタリアートが直面している唯一の問題はまさにプロレタリアートが存続していく方途であることを看取った我々は、革命に真にラディカルな意味を回復させるため、日々の生活情況の中に階級闘争を持ち込んだ。このラディカルな活動は即座に可能となり得るものであったが故に、そのラディカリズムは即座に実践的な方法となって表現された。SIはその当初から決然と社会の中に割って入って行こうと努めた。こうした介在は最初、全く文化領域だけに制限されていたが、少くともそれは真の革命的実践への原基を抱摂していたといえる。

革命的実践の言明にも拘らず、プロレタリアートの革命的行動能力を愚弄する一方で、自らは前衛主義者らのハプニングの腐り切った華やかさの中に安息場所を見つけていた諸党派を排除すると共に、前衛といわゆる〝芸術〟に対し鉄槌を加えることによって文化組織としてのSIから早急に脱皮した後、SIは自らを過去の革命的伝統である、かの階級闘争の中に位置付けようと努めた。そうすることによってSIは、この歴史上最もラディカルな位相と、質的に新しい世界の構築へと長征した思想と事象、これら二つの情況の中で自己を認識した。しかしSIによって前進した理論的地平はこの時、マルクス理論やアナキスト的行動、それにLautreamontやランボーetcの詩的ラディカリズムなどの単なる折衷融合に帰因したのではなく、即ちそれはこうした個々の伝統の廃棄を一様に表わしていた。即ち近代資本主義の激しく変化する情況に相応した、一貫した理論を先取、発展させるプロセスの過程にあった。こうした作業の中で、すばらしい数々の見解が他の部分から充当され、SIは決して孤立してはいなかった。〈スペクタクル－Spectacle〉という独特の概念、〈日常生活－Daily Life〉の概念などはルフェーブルから由来したものであったし、労働者評議会の伝統はパンネコックによって初めて分析され、それは〝社会主義かバーバリーか〟グループなどによって引き継がれていた。しかし、とりわけ新しいもの、SIを徹底的にラディカルにしたもの、それは他でもなく、これらの諸概念がブルジョア社会のトータルな批判を産み出すべく充用された、その方法であり、この批判を実践化したSIの努力であった。

近代的社会学者ルフェーブルや無能な〝社会主義かバーバリーか〟グループとは違って、SIはそのラディカリズムを重要視した。一つの組織として、SIは単に世界に介在したのではなく、世界そのものを変えようとした。SIは何よりも革命者の組織であり、単なる評論家集団ではない。他の組織よりも理論的にSIを進展せしめたものは、今日の現実を理解する上で、社会学者らがするやり方でなく、革命的行動に連座する能力があったからに過ぎない。SIの考え方が抽象的に展開されていないのは、このためである。六〇年代初頭の山猫ストと若者の暴動、それとアルジェリア独立後の自主運営闘争は、どちらが革命の新しい理論を

展開させるか、という問題に関してSIに実証的なオープニングを用意してくれた。この当時のSIは可能な限りラディカルな結論を引き出し、その理論的探究はプロレタリアートの行動によって実証的に確認されることを建前としていた。階級闘争へのアプローチもそのラディカリズムの一手段に過ぎなかった。トロツキストやスターリニスト党の雑派どもが半世紀に亘る反革命に、改良主義者、官僚主義者まがいのウソ八百を飽きもせず並べたてることしかできず、更にはレーニズム（アナキズムetc）を超越した者でさえも近代社会のうっ血状態からしか方途を見い出せずにいたとき、SIは近代プロレタリアートへの出発に関し、彼らとは根本的に異った点を提起した。また数々の思想家たちが、プロレタリアートはもはや体制内の一部として組み込まれてしまっており、せいぜい改良主義者まがいの政策しかとり得ないという論拠を必死になってかき集めているとき、SIは何人も疑う余地の無い社会の平和に対し、その幻想的本質を声高く論じた。思想家らが正当な〝選挙〟と見たてたところでは、SIはその奥底にあるラディカルな不平不満を見てとった。即ち「具象化と官僚化が生活の内部にまで深く切り込んでくればくる程、スペクタクルと日々の生活の疲労、消耗は誰の眼にも増々明白になってくる。」（『根本的腐敗』SI誌八号）この不平不満は単に一つの社会的尺規に限られてはいない。SIにとって、近代プロレタリアートとは自らの生存情況に何らの支配力も持たない全ての者によって構成されることを意味した。そしてそれはSIが未来を先取りするラディカルな詩の所在であると考える、日々の生活の貧困から由来したものであり、その期待は一九六〇年代のかつてなかったほどの速さで確認されつつあった。

SIの理論的発展は、ヴァニガムとデュボーの二人の著作が出された年に、その成熟期に達し、今までの実験的段階を踏まえて一つの社会力に変わろうとした。そのために近代資本主義へのラディカルな闘争に介在し、資本主義―ブルジョア社会を崩壊し得る一つの革命闘争拠点を構築する上で、努めてスキャンダラスな可能性を追求していった。アルジェリア労働者への書簡、スペインでのアジテーション等、なかでもすばらしい成功をおさめたのが、今では殆んど無名になってしまった、一九六六年のストラスブール大学で起きた〝ストラスブール・スキャンダル〟（当大学の学生組合の奪取）であり、こうした大学内での闘争（即ち、学生組織の改良主義者らによる教育上の諸問題、いわゆるベトナム戦争等の問題の抗議運動に対し、SIは学生生活そのもの、総体としての体制的生活そのものへ批判の矢を放った）を契機に、それを革命についての具体的な闘争へと発展させ、ここにラディカルな学生の結集軸を創造した。いうまでもなくこの学生運動は革命的様相を呈し始め、フランス中の各大学でSIの長年追求してきた理論が定着し、公式化された。こういった情況の中で、大学レヴェルではあるが、SIと学生グループとの合同委員会が結成され、かのソルボンヌ大学の占拠を闘い貫いていった。この間に、大学レベルでの諸問題を労働者らにアピールしていく中で、フランス労働者の最初の工場占拠があった後、委員会は初めて、自主運営と労働者評議会結成を呼びかけた。

占拠闘争が続行するうちに、ソルボンヌの集会では他の官僚的諸雑派、左翼セクトらが支配力を強めた頃、SIと学生グループ

は独自に占拠維持評議会（ＣＭＤＯ）を結成、ソルボンヌを去り更に革命的核心へと、即ち工場占拠によって、学生運動は社会革命の可能性を内包しつつあることを認識した。更に更にＣＭＤＯは五月運動の革命運動化への障害を明らかにしていく中で、スターリン的組合や党の再生者（こうした人々は常に運動を改良してしまうか、官僚的な党にしてしまう）やその他諸グループ（トロッキスト、毛沢東主義者、そして短絡的結合による闘士の〝行動委員会〟を形成するアナキストの混乱を非難したばかりか、自主運営の問題を具体的に、即ち可能なものとして提起した。

一九六八年六月、反革命連合の先兵（政府とスターリストｅｔｃ）によって革命運動は敗北したものの、そのラディカルな内実までも消去させることは絶対にできなかった。むしろ革命はあらゆる地域に一つの可能性として存在した。そして何よりも五～六月運動はＳＩの理論と実践の承認を意味し、その思想はかって見られなかったほど普遍化された。六月の占拠が終るとＣＭＤＯは解消され、ＳＩは以前よりも増したメンバーによって再びグループ化した。しかしながら、運動の成功に喜んでいる一方で情況主義者はとてつもなく大きな障害に出くわした。組織内の問題である。ＳＩはエセ情況主義者（革命を瞑想的に、イデオロギー的に論じ、何らの実践もしないでいるダラ幹）によってことごとく悪評をかい、こうした傾向はやがてＳＩ内部にも横行し始め、その結果ＳＩの継続的前進に重大な障害を与え始めていた。

こうしてＳＩは理論面での一貫性をさらに徹底させるばかりか、その存在がある限り組織的にも一貫性を具備させることが、ＳＩ自身の大きな任務となった。ＳＩはこれまで可能な限り、最も民主的な基盤を組織し、そのメンバーの全面的参加を確保してきたのだが、数年後、ＳＩの発展を阻害する多くのメンバーを排除せざるを得なかった。これは決してブルジョア傍観者どもがやる誇大妄想的衝撃の結果ではなく、組織の民主的基盤を確保するうえで、絶対必要であった。一九六九年以後のＳＩは、情況主義者のラディカルな拡大ではなく、他ならぬ組織の長期的な内部危機に見舞われた。

この問題は実際のところ、五月のずっと以前から認められていたものであった。そしてこの障害の原因も即ち仲間意識をすぐ様、飛び越えて専らラディカリズムを拡大させたあたりに存在していた。ラディカリズムそのものに注意を引きつけ、次には個々のメンバーにラディカルな〝雰囲気〟を注入してしまった――ＳＩはプロレタリアートの諸問題をすでに〝超越〟してしまったものとして把えられたに相違なかった。もしＳＩが理論家の少数グループとしての態勢を廃棄するならば、新しい組織形態と実践の遂行が必要であった。デュボーはこの事に気づいて言った。「ＳＩは革命的行動のまさにその後の段階で、その実効力を証明しなければならない。さもなければ消滅するだろう。」ＳＩは五～六月にその〝実効力〟を証明はし得たのであるが、この能力を保持することは不可能であった。

情況主義者の思想は前例の無いほど普及されたのだが、一方ＳＩ自体は、内部組織問題に占有されてしまい、更にこれへ追い討ちをかける様に、構造上の問題にも襲われた。即ち、独自に展開していたはずのナショナルセクション（フランス、イタリー、アメリカ、ｅｔｃ）がフランスセクションのイニシアティブに背を

もたれて来たのだ。この結果、各セクションによる展開は殆んど無くなってしまっていた。一九六九年以後、SIの不毛状態は続き、理論的にも実践的にも何ら進展をみず、事実上国際的革命組織の崩壊が始った。一九七二年までには排除と除名を繰り返えした結果、メンバーはただの二人にまでになった。これは決して数が減ったからではなく、彼ら自身の論理的帰結であった。SIが全てではないし、又全てでは決してなかった。その欠陥は、今日の革命運動の欠陥の一部でもある。

―POINT・BLANK一号より抜萃

我々はアナキストではないが、日本の様々なリバタリアンやアナキストグループと連絡を取りたい。日本ではどんなラディカルな活動が進められているのかが我々の最大の関心事であるが、おもしろいニュース、出版物などが有れば是非送って欲しい。

腐り切った時代に終止符を！

一九七四年三月三十一日

POINT-BLANK

P.O.Box2233 STA.A

Berkeley. CA.

U.S.A.

× × ×

香港の左翼

―七〇年代戦線―

ユー・ハン　他

ここで述べようとする香港での反体制運動とその思想は、かなり新しいものであり、わずか十数年の歴史をもつだけである。もちろん、イギリス領直轄植民地という今日ではきわめて特異な背景を考えるならば、現在の運動に直接つながることのなかった民族解放闘争の数多くの歴史を予想させるであろうが、ここでは一九六六年以降の新しい世代によって担われた運動を報告することにしよう。本稿はユー氏の話をもとに、編集部でまとめたものである。

一九六六年―値上げ反対運動

この年、公共料金の値上げに対して青年（十七～二四歳）層を中心に自然発生的、自発的な反対運動が起きた。これは明確な政治的目標もなく、特定の組織やリーダーによって取り組まれたものではなかったが、ハンスト・デモが展開されたのである。こうした反対運動に加えられた警察の弾圧はかなり強いものであったが、この反対運動は公共料金の値上げ幅を縮小させる成果を勝ち取ることができた。この反対運動は、香港の青年たちの間にあっ

た不満を発掘したとみられている。

一九六七年―中国の文化大革命と反イギリス暴動

それまで労働組合（工会）に勢力をもっていた毛沢東主義者は文化大革命の影響のもとに五月労働組合を動員して〝香港解放〟を主張した。しかし、そこにははっきりとした方針、理性的主張もなくテロ行為やゲリラ活動が行われたが、これは明らかに革命とは異質の反イギリス暴動にすぎなかった。一般の市民はこれに関心をもたず迷惑と考えていた。結果は政府との妥協による闘争放棄となり、この事件によって毛沢東派の組合に分裂を生じ、以後さまざまな形での不信感が根強く残ることとなった。

前年の公共料金値上げ反対運動とこの反イギリス暴動とは、香港の人々の間に存在した現状に対する不満を顕在化したといえる。そして、青年・学生・知識階級の中に社会問題に対する関心の高まりと、注目を一般傾向としたのである。また、学生運動の世界的な動きは香港の学生の間にも刺激を与え、学校改革を目的とした多くの動きをまき起こした。従来存在していた学生会は、便宜的・福利的な組織であったが、こうした流れの中で政治や社会問題を重視する活動体に変化し、政治・社会問題への注目という社会的変化の中で、学生運動はそのシンボルとなった。と同時に一九六七年以後は、一般市民の政治的関心の高まりと共に、それまでは全くなかった政治的デモも事珍しいことではなくなったのである。

一九六九年―『七〇年代』双週刊の発行

そして一九六九年の末に、一つの新しい動きが起こった。それは、珠海書院の学生一四名が学生会の組織化活動の途中で退学処分を受け、抗議デモをして逮捕されたという事件である。マスコミはこの事件に対して体制的発言に終始したが、事件後に独自の出版物をもって主張していかねばならないとの提案がなされ、まもなく『七〇年代』双週刊（月刊の同名の雑誌があるが、これは毛沢東主義者の刊行物である）の発刊（七〇年代戦線グループ）として実現した。

内容は諸外国の前衛的新思潮の紹介（マルクーゼ・フロム・無政府主義など）や文学・文芸作品、映画・美術にわたるものであった。その立場は、特定の原則・政治的主張に立つものではなく、自由主義的・小ブル的立場にあったが、その頃の市民からみれば過激派であり一番進んでいたといえる。そして、労働組合や学生などの諸グループに対し、いろいろな点について問題提起を投げかけることにおいて重要な役割を果たしたのである。

一九七〇年―中文法定運動

この年の夏から秋にかけて、香港では再び大衆的闘争の高揚を経験した。中文法定運動がそれであった。香港の人口は広東人を中心とした中国人が九八パーセントを占めており、民間では主に広東語が使用されているが公用語は英語となっている。こうしたイギリス支配に対して、中国語を公用語にせよとの要求を掲げた運動が展開されたのである。この運動には、植民地支配下に抑圧された民族主義の流れが表面化したという一面があった。

この運動は、集会を重ねつつ、やがて労働者と学生による工学連盟へと組織化された。七〇年代戦線のメンバーはこの運動のなかで重要な役割を果たし、同時に若い人々の同グループへの参加がみられた。中文法定の署名運動は四〇万の人々（人口は約四〇

○万）の署名をとり、政府に中文公事の研究委員会をつくらせた。しかしこうした支持を得ながらも、工学連盟はやがて官僚化し、運動は停滞した。そこには政治的主張の欠如、それ故に問題をつきつめ発展させることができなかったことが指摘されよう。

一九七一年―尖閣列島問題（保釣運動）

この年の初め、尖閣列島の問題が起こった。そして日本の同島に対する領有宣言に対し、アメリカに在住していた中国人留学生が抗議運動を起こし、この影響もあって、二月にはいくつかのデモが行なわれ、七〇年代戦線も日本大使館へのデモを組織した。こうした動きは、民族主義的傾向を帯び、一般市民がこの運動への支持を表明するなかで発展した。四月には毛沢東主義者・七〇年代戦線の提起した日本大使館へのデモは千～二千の参加者を得た。

こうした運動は大別して三つの傾向から構成されていた。その一つの毛派はこの運動のなかで祖国（中国）復帰の宣伝のための組織をつくろうとしていたし、他は民族主義・愛国的傾向であり、そして七〇年代戦線である。七〇年代戦線はこの運動を検討し、社会改革へと突き進めない限り、毛派の祖国復帰あるいは単なる愛国的行動に留まること、そして当面はデモやストを非合法とする現体制に対して抗法運動を起こすことを主張した。

こうした思想的差違は、学生連絡会（特別に強い主張なし）・毛派・七〇年代の共闘のもとで提起された七・七集会の経緯で明らかにされた。前二者は集会の申請を主張したのに対し、七〇年代は集会の自由という権利獲得を軸として無申請による集会決行を提起した。結局共闘は実現しなかったが、香港政府が申請を不許可としたので結果的には七〇年代の提起した形での集会が行なわれた。ヴィクトリア広場には四千人が坐り込み、一万余の群衆が集まり、警察も手を出しかねる状況となった。二一名の逮捕者を出したが、この弾圧に対する抗議はマスコミ、市民をまきこみ大きな力を示した。この運動は、しかし八月十三日のデモ（参加一万五千名）を最高潮に急速に後退してしまった。

一九七二年以降―社区運動……

総じて運動は停滞期を迎え、分裂と混乱と失望が生じた。こうした背景のもとに主としてアメリカの自治思想・地域運動の影響を受けた社区運動が展開された。これは社会的問題を発掘し、提起し、政府にぶつけていく民権運動である。具体的にはスラムの問題を取りあげ、その改革を要求することを目標とした。この運動には学生・インテリの積極的参加をみたが、改良主義へ傾斜する危険をはらんでいると言えよう。

また、尖閣列島の闘争の過程で形成された労働者と学生の連合体＝工人学生連合戦線が三つの思想傾向に分裂したのは一九七三年である。それはトロツキー派、新左派、無政府主義（少数派）の三つであり、後二者が七〇年代戦線を構成している。七〇年代戦線の現状は、十七～二六歳の世代、十数名のメンバーと二〇余名のシンパによって活動している。雑誌は一年ほど後に経済的理由によって休刊したが、現在その再刊に取りかかっている。思想傾向は、反毛・反スターリン・反レーニンを共通軸に新左派・無政府主義・ローザルクセンブルグという各思想各派を含んでいる。課題としては、政治理論のレベルをあげること、社区運動をテーマに取り組んでいくつもりである。